



比のマザー・テレサ

神様がわからないもの一つに女子修道会の数という話がある。それほどカトリック教会のシスターの会がたくさんあることを指すジョークである。非カトリック国の日本にも九十五もあるから、世界となると相当な数になるのだろう。それぞれの会は独自の目的を持って創立されたものであり、一つの修道会でも大きいものは世界各地に修道院がある。

彼女に初めて会ったのは一九八一年、マニラのスラムにホームステイした時である。彼女はマニラのレベリーサにあるスラムに自らも住み、貧しいスラムの婦人たちのアラ

イカプア(タガログ語で助け合うという意味)という共同体を作り、信仰だけでなく、実際の生活が少しでも豊かになるように活動した。共同体で作るのは石けん、さまざまなレール編み、竹かごなどで、これらを売り、生活の糧にしている。私たちも少しでも役立てばと、製品を日本に持ち帰り、各地の教会のバザーで販売する活動をしてきた。クリスマス・タンからは毎年、クリスマス・カードや事業報告な



ありし日のクリスマス・タン

どが送られてきたが、二〇〇三年に亡くなった。共同体の活動は今も続けられており、今回、二十年ぶりにレベリーサを訪問した。狭い路地の奥にあるのは以前と変わりなかつたが、集会所兼事務所は広くなり、製品がたくさん展示してあつた。

一つ驚いたことがあつた。今回は神父を団長に八人で行つたが、最年少の下松教会の中村瞳さんはフィリピンは初めて。出発前にインターネットでフィリピンの土産を調べた。その中にレベリーサの共同体が作るジュースの紙パックを加工し

た手提げ袋があり、それが東京などの若者に人気があるそうで、それをお土産に買いたいと言う。そして、レベリーサを訪れると、大小さまざまな袋があつた。アライカプア共同体は貧しい婦人たちが助け合いながら着実に成長していることがよくわかる。今は自分たちよりももつと貧しいセブ島の人たちを支援しているという話を聞き、クリスマス・タンの偉大さに胸を打たれた。しかし、これはマザー・テレサやクリスチ

ン・タンに限ったことではない。神父やシスターは結婚することなく、生涯を神に奉仕する。言葉を変えれば私利私欲を捨て、他者のために生きるのである。神もわからぬほどたくさん女子修道会があると書いたが、今、どの修道会も若者の召し出しが少なくなり、高齢化が進み、閉鎖する修道院もあるという。人間は本性的に自己中心。クリスマス・タンとの出会いを大切にしなければと思った。(元山口放送取締役ラジオ局長)



パックのリサイクル・バッグを持つ中村さん